名所物見の旅　其の伍拾八　天国にいちばん近い島のバナナ

ニューカレドニアに滞在する旅行者が必ず訪れる観光スポット・アメデ島。周辺にはアカウミガメやアオウミガメが生息し、行き帰りのボートから間近に泳ぐ海亀の大きな姿を見ることもできる。

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

バナナの思い出

昔バナナは高級品だった。昭和二十年代からわたしが子供の頃の昭和三～四十年代にかけて、バナナは遠足や運動会のようなハレの日に誇らしげに持ってくる貴重な贅沢品として存在していた。近所の八百屋さんには“台湾バナナ入荷”などと大書されていて、そのほとんどが台湾からの輸入品だったようだ。戦後二十年近く経って社会全体の経済は上昇していたが、一般家庭の多くはまだ貧しく、バナナは子どもたちの憧れの果物だった。

数年後の高校生の時、日曜日になると親友とよく自動車工場の日雇いアルバイトに行った。肉体労働によって高額な日当をもらえるのが魅力で、陸上部の友は短距離用スパイク、山岳部のわたしは登山靴を買う計画を立てていた。友とあれこれ買いたい物のことを語り合っていた帰り道、友はふと八百屋の店先にバナナを見つけると、大きな房を選んで買って帰っていった。バナナが大好物だと彼は言っていたが、自分の小遣いで果物を買うという感覚を持たなかったわたしは、ちょっと不思議な気がしていた。

しかし四十年経った今になって考えると、母子家庭で育った彼は小さいときに満足にバナナが食べられなかった思いがあったのかもしれない。彼には三人の弟や妹がいたので、幼い子たちのために買った可能性もある。昭和四十年代の高度成長期の変化は目覚しく、もうその頃にはバナナはけっして高くはなかったが、彼なりのバナナに対する思い入れがあって、アルバイトで稼いだお金で家族の為にバナナを買って帰ったのではないだろうかと、あの日のことを思い出すのである。

スゼッテさんが手にしているのが料理用バナナ「サバ」。奥に並ぶ大きいバナナが「プランティーン」。アフリカや東南アジア、太平洋の島々、中南米などでは料理用バナナは重要な食材として扱われている。

料理用バナナに病みつき

二十代になって海外を旅するようになると、料理用のバナナに出会うことも多くなった。世界には料理用バナナを主食にする民族もたくさんいて、食べてみるとバナナというよりイモ類のような澱粉質が特徴で、一般的な揚げ物をはじめ、煮込み料理や豚肉巻き、茹でてサラダにしたり、コロッケもおいしい。わたしはすっかり病みつきになって、一時は家庭でもよく食べた。小型でたくさん実の付いたサバという種類のバナナがアメ横などでも手に入るので、目先の変わった食材として利用する人も多い。プランティーンバナナは日本ではなかなか見かけないが、日本に滞在する中南米の人たちにとっては一番人気を集める郷愁の味のようだ。

イル・デ・パンのバナナ

ニューカレドニアは森村桂の小説「天国にいちばん近い島」として有名で、原田知世主演で映画化もされている。こうした小説や映画に縁のないわたしはどちらも未見だが、ニューカレドニアへ行ったのは映画が話題になった後だったと思う。今はどうか知らないが、二十数年前はニューカレドニアのヌーメアまで日本からの直行便は週一便しかなく、フライトチケットは最低で8日間。以降15日間、22日間といったサイクルになっていた。わたしたちは天気も考慮に入れて15日間の滞在予定で訪れたが、一週間もするといささか退屈し始めていたので、イル・デ・パンという島にフライトがあるのを知って、面白そうだからと行ってみることにした。

イル・デ・パンにはリゾートホテルが一軒と、あとは個人経営の民宿のような宿が数軒あるだけだというので、貧乏旅行者としては当然民宿を選んだ。行ってみて驚いたのは、民宿は中はベットを置いただけの家具も何もないがらんどうの石造りの小屋で、食事は民宿の主の家の小さなダイニングルームに用意され、まったくのところ南の島で居候生活を送っているような気分だった。

当時のイル・デ・パンはホテル以外施設に関するものは一切なく、手つかずの本物の自然の中に美しい海が広がっていた。ホテルに泊まらなかったわたしたちにとって問題となるのが昼食で、民宿の家族は昼間みな仕事で留守にしており、民宿からホテルまでは遠すぎる距離であった。近くに一軒しかないレストランはサンドイッチ類しかメニューにないのに予約が必要で、忘れると昼食にはありつけないことになる。毎日わたしたちは民宿での朝食の後、自転車でレストランに行って予約を取り、それから気が向いた方角に走って、気に入ったビーチを見つけて遊んでいた。

イル・デ・パンの海と原始的な木彫りのカヌー。白い砂浜とエメラルドグリーンの美しい海が広がり、自然のほかにはまったく何もないところが魅力だった。

メラネシアンの黒人夫婦が経営する民宿での夕食は、素朴でおいしいフランス風田舎料理が並び、その食卓でデザートに供されたバナナを食べて驚いた。こんなおいしいバナナは初めてだ。というよりバナナがこんなにおいしかったとは。いままで食べてきたバナナとは別次元のシロモノだ。おそらく完熟したものを、食事直前に採ってきたのだろうが、その甘くねっとりした味は、それまでまったく経験したことのない、バナナのイメージを超えたものだった。いまでもあのバナナをもう一度食べたいと思うが、再びイル・デ・パンを訪れるチャンスはおそらくもうないだろう。だから他のどこかで、あのようなおいしいバナナに巡りあえることを願っている。

イル・デ・パンでは金はなくとも、真っ白い砂のビーチとエメラルドグリーンの海を自分たちだけで占領し、とろけるような甘いバナナを食べ、夜半は小屋の外に出て満天の星に感激する贅沢な毎日を過ごしていた。しかしわれわれは大いに後悔していたのである。こんなロマンチックな場所に、男同士で来てしまったことを。

イル・デ・パンにはたくさんの入江があり、プライベートビーチとして我々だけで占領することができた。

日米親善歴史ツアー通訳ボランティア募集

10月及び11月に開催する「日米親善歴史ツアー」の通訳ボランティアをして下さるMLC/IHAの方を募集いたします。

（日時）
- 平成23年10月2日（日）
- 平成23年11月19日（土）

（募集人数）
各日程につき6名ずつ＝計12名

（主な仕事内容）
- 歴史ツアーに同行し、行程内に設けた軍人との交流会「コミュニケーションタイム」の通訳をしていただきます。日常会話程度の内容です。

- 日米親善ベース歴史ツアーは米海軍横須賀基地と横須賀市が共催し、全国各地から150名が参加する大変人気のあるイベントです。
- 3つのグループに分かれ、時間差で出発します。（①1000-1400、②1030-1430、③1100-1500）各グループには横須賀市ガイドボランティア、軍人2名と通訳ボランティア2名がつきます。
- ツアーは徒歩約4時間、横須賀基地内にあるドライドックなどを含む様々な歴史的遺産を見学します。
- 歴史関係につきましては横須賀市ガイドボランティアが案内しますので、通訳の必要はありません。

申込・問合せ先：CFAY広報　佐藤（Fumiyo.Sato.JA@fe.navy.mil）